

2010年度幹事報告

庶務幹事この一年

原田 慈久 (東京大学大学院工学系研究科)

昨年8月に、百生前庶務幹事より過去の資料を収めたCDと虎の巻のファイルを受け取り、その任務の多さにたじろぐ暇もなく、尾嶋体制での仕事が始まりました。庶務幹事という役務は、学会活動を円滑に進めるために陰で立ち回る重要な仕事です。それまで学会を運営する立場になかった私は、庶務は学会の表裏を知り尽くした人間がすべきだろうという御批判をいただくことを覚悟しながら、この1年、学会運営のいろはを学びながらどうにか務めを果たして参りました。

学会の年度区切りの変更により昨年10月より始まった尾嶋体制で、広報活動の充実、会員増強とブルーバックスの発刊という目標を打ち出した矢先の11月13日に、事業仕分けによる放射光関連予算のカットという激震が走り、必然的に対外アピールに向けた精力的な活動が始まりました。幹事会、評議員会、総会の運営と評議員選挙、奨励賞選考等の定例業務をこなすだけで精一杯であった私にとって、これらの外乱に対処するために、幾度にわたる他学会との共同声明やノーベル化学賞記念シンポジウム、学術会議と連携したシンポジウムや出版企画等々、実にタイムリーにアピール活動を繰り広げる尾嶋会長のフットワークは驚異的でしたが、それらの活動への関わりを通じて、放射光学会がこの荒波を辛うじて乗り切る現実を目の当たりにしました。

対外活動の一方で、学会自身の体力を維持するためには、一定数の学会会員の確保が重要です。ここ2、3年、会員数は減少傾向にあり、これが前体制からの懸案事項として残されておりました。そこで、日頃研究を支えるツールとして放射光を利用しているユーザーや放射光業務に関わる方々、学生を中心として学会会員の増強を図り、この1年で100名を超える会員数の増加になりました。またこの一環として、長年放射光に貢献してきた会員が学会へ貢献するための受け皿となる、シニア会員制度を導入しました。学会に入会するメリットがあるかどうかよりも、単に年會に参加するため、あるいは学生の間だけ入会するユーザーも少なからずいます。しかし実際には、行事委員が主催する基礎講習会や若手研究会が軌道に乗り、また編集委員が放射光ユーザーの理解を深めるためのシリーズ企画を連載していずれも大変好評を博しており、会員であることのメリットは目に見える形で表れていると思います。今後ますますこれらの学会活動を周知し、放射光ユーザーのすそ野を広げる努力を続けて参ります。

この1年、庶務幹事の力不足を補うべく、尾嶋会長、幹事の皆様はもちろんのこと、事務局の佐藤さん、西野さんにも多大なサポートをいただきましたことを感謝致します。

行事幹事この一年

木村 滋 (高輝度光科学研究センター)

2009年10月より行事幹事に就任し、はや1年が過ぎました。ご存じのように、就任直後に行われた事業仕分けでは、放射光科学界に激震が走りました。結果的には、放射光学会員をはじめとする放射光関係者が一丸となって、放射光の必要性、有用性を強く訴えて頂いたことが力となり、大幅な予算削減は避けられましたが、今後も放射光科学予算を取り巻く状況が厳しいことには変わりはありません。このような状況下に行事幹事を務めることとなり、「学会会員の増強」と「一般社会への広報活動」の重要性

を痛感しています。

さて、2010年度に実施した放射光学会の主要な行事は、第23回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム(JSR10)、第2回若手研究会、第2回放射光基礎講習会でした。イーグレ姫路での開催となりましたJSR10は、「リーマン・ショック」に端を発した景気低迷の影響を受けるのではないかと不安を感じておりましたが、山本組織委員長(前行事幹事)、高田実行委員長、後藤プログラム委員長のご尽力により、607名の参加者を得

て、大成功裡に開催することができました。

若手研究会と放射光基礎講習会は、若手研究者の育成と潜在的放射光ユーザーの掘り起こしを目的に2009年度から始まった行事で、どちらも8月に第2回を実施しました。参加者も放射光基礎講習会105名、若手研究会106名、と100名を超える大盛況でした。特に、放射光基礎講習会については、第1回では1日開催であったものを、基礎編1日、応用編1日の計2日間に拡充したため、参加者が減らないかを心配しましたが、大学院生、企業の若手研究者を中心に多くの会員の方々に参加していただきました。また、賛助会員企業の社員の方々にも多数参加いただき、日頃のご協力に対し、行事を通して少しは恩返しできたのではないかと考えております。

一方、若手研究会は、小副会員（高輝度光科学研究センター）提案の「顕微分光のフロンティア」が採択され、実施されました。参加者100名規模の研究会に関し、plan

(企画) - do (実施) - see (評価) のサイクルを経験できるこの機会は、若手研究者にとって大きな財産になると信じます。

年明け1月には、第24回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム(JSR11)がつくば国際会議場で開催されます。これが、私が組織委員長として開催する最初のものになります。組織委員長が不慣れな分を、経験豊富な若槻実行委員長、村上プログラム委員長に補ってもらい、順調に準備が進んでおります。また、今回はJSR11の期間中に市民公開講座も放射光学会が主催となって開催します。会員の皆様におかれましては、ぜひともご参加いただき、JSR11を盛り上げて頂きたいと存じます。

最後になりましたが、この1年間の会員の皆様のご協力に感謝するとともに、引き続き、ご指導、ご協力をお願いいたします。

編集幹事この一年

足立伸一（高エネルギー加速器研究機構）

前任の櫻井吉晴氏から編集幹事を引き継いで、約1年間に行った活動について、ご報告いたします。まず会誌発行に関わる現在の支出状況についてです。学会誌「放射光」は隔月刊の年6号発行で、その印刷費として年間約900万円を計上しています。これに会誌発送の手数料・郵送料を加えますと、約1000万円となり、この金額は全会員の会費収入（約1100万円）にほぼ匹敵しています。学会誌の発行は学会活動の根幹を成すものですが、文字通り、(学会費)≡(会誌印刷費)という事実、編集幹事を引き継いで、改めて身が引き締まる思いでした。この点については、第1回目の編集委員会において、編集委員の皆さんにも認識を共有していただき、充実した誌面作りを肝に銘じて、日々編集活動を行っています。例えば、新規記事提案や会誌発行に関わる議論をより日常的に活発に行うために、編集委員会のメーリングリストを活用したメール審議を行っています。また、編集委員会に出席しやすくするために、2010年2月の編集委員会から、東京と播磨をテレビ会議システムで接続して開催しています。一方で、1号当たり平均150万円という印刷費支出を削減する方向で見直す動きも、並行して進めています。

20名の編集委員には、ご多忙にもかかわらず、記事提案・査読などに精力的に取り組んでいただいています。特に、前期から引き続いて「検出器シリーズ」を担当された岸本委員(KEK)と田中委員(播磨理研)により、3年

に渡るシリーズの企画・発行が23巻2号で無事完了し、現在、単行本の発行に向けた準備が進められています。X線集光技術特集号(23巻3号)と「EUV SASE-FEL利用の展開」特集号(23巻5号)は、それぞれ矢代委員(東大)と永園委員(理研XFEL推進本部)の企画立案によるものです。両編集委員のご努力により、これまでにない切り口で、放射光科学の現在を捉えた特集号が実現しました。次の1年においても、時機を得た特集号、シリーズ企画を行っていきたく考えています。

尾嶋会長の発案による放射光学会編ブルーバックスは、編集幹事を中心とする特別編集グループにより、講談社側担当者との連絡を取りつつ、編集作業を進めています。諸般の事情から、当初の目標であった2011年1月の発行は日程的に無理な状況ですが、2011年度の春夏頃の発行を目指して鋭意作業を進めています。企画担当者、執筆者の皆様には、引き続きご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

最後になりますが、「放射光」に優れた原稿を寄稿していただいた執筆者の皆様、各方面で支えていただきました編集委員、尾嶋会長および幹事の皆様、そして事務局の佐藤さん、西野さんに感謝いたしますとともに、残りの任期中、引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

渉外幹事この一年

水木純一郎（日本原子力研究開発機構）

尾嶋会長から「若い幹事達の重しになってほしい」という、喜んでいいのか（歳を感じて）悲しんでいいのか分からないラブコール？を貰って早1年が過ぎてしまいました。「他人に利用されるうちが華」という人生訓を持っている私としては二つ返事で引き受けたものの、渉外幹事の役割をほとんど理解していない状態でした。まずは尾嶋会長の公約の一つである、「会員数1500名を目指す」をどのようにサポートしていこうかと考えている矢先、大きな仕事飛び込んできました。例の事業仕分けです。SPRING-8の予算を1/3から1/2減額するというとんでもない案が行政刷新会議で出され、これに放射光学会から将来禍根を残すようなことをしないでほしい、という要望書を出そうということになりました。その一つとして海外の研究者から Supporting letters を送ってもらおうということになりました。これには尾嶋会長をはじめ、歴代会長・評議員・幹事の方々も大変努力をされ、確か36名の海外からの Supporting letters を貰うことができました。これらを纏めて尾嶋会長が文科省に要望書とともに持って行かれ、効果絶大であったことは放射光学会員の皆様もご存じのことと思います。

「渉外」役は放射光学会とそれを取り巻く外との交渉役、

パイプ役となることが仕事です。放射光学会が代表として行っている事業のひとつにアジア・オセアニアフォーラムがあります。具体的な活動は、毎年開催されている会合（AOFSSR）と Cheiron school があります。渉外幹事になるまでは、この事業は理研、KEK が主体となっている事業とばかり思っていたので認識不足を取じるとともに、たぶん多くの学会員も同じような認識をしているのではないかと思い、しっかりと学会員に情報発信することによって本事業をご理解していただき、名実ともに学会が代表している事業として位置づけられるようにすることも渉外幹事の役目と思っています。

一つ皆様に謝らなければいけないことを白状します。前渉外幹事の繁政さんから引き継いだこととして、放射光学会年会を Synchrotron Radiation News (SRN) に報告書を投稿することになっていました。しかし2010年度はこれをすっかり失念してしまいました。2011年度はこのようなことのないように、ルーチンとしてしなければならないことを着実にこなした上で突然降ってくる外部からの要請に対して対応していきたいと思っています。闘う学会としての渉外幹事の役割を考えさせられた1年でした。

会計幹事この一年

木村真一（分子科学研究所）

4年ほど前に2期務めた幹事（渉外と行事）が終了し、もう2度と役目が回ってこないだろうと安心しきっていたところ、尾嶋会長から突然会計幹事を指名されて1年が経ちました。以前に幹事だった頃にもすでに問題点として指摘されていたことですが、放射光学会は財政基盤の確立が懸案事項になっています。そこで、まずは財政の洗いなおしに取り組みしました。その結果わかったことは、2007年度からの会費の値上げで以前の危機的状況は一瞬抜け出せましたが、企業等の賛助会員[*]からの会費収入が10年前に比べて約1/3に激減しており、会費の値上げ分を相殺しています。現在は、年会・合同シンポの余剰金

を組み込んでやっと学会会計が成り立つ状況です。つまり、年会・合同シンポからの余剰金がないと、学会の収支は100万円以上の赤字になります。このような会計は健全ではありませんので、年会・合同シンポの余剰金を組み込まなくとも黒字になる経営努力が必要です。これを改善するためには、収入の面からは、①賛助会員の数を10年前の水準にまで戻す、②講習会等からの収入を増やす、③年会・合同シンポの企業展示数を増やす、④単行本の出版による印税収入等が考えられます。この中で、①については、日本経済が不振の現在では参加企業を増やすのは難しい状況ですので、各放射光施設や団体に賛助会員になって

いただくことを今後提案していきたいと考えています。②、③、④については、会長や各幹事と相談しつつ、増収をはかりたいと思います。支出の面からは、会費収入の8割以上を占める学会誌の印刷費用を下げるのが一番効果的であると考えられます。これについても、会長や編集幹事と相談しつつ進めていきたいと思っています。以上を念頭に置

きながら、残りの任期も学会財政の健全化に努めていきたいと考えております。

[*] 賛助会員の会費は5万円で、会費から学会誌の費用(約6300円)を除いた分を収入としてみると、約26人の正会員(会費:8000円)に相当します。